

戦時下の村と陸軍飛行場（会期：平成31年1月9日～令和元年6月2日）

チラシ裏面



プロローグ

陸軍八日市飛行場の開設

ライト兄弟による動力飛行機の成功（1903年）のあと、第一次世界大戦（1914～18）ではさっそく飛行機が軍事利用されます。日本でも陸軍所沢飛行場に飛行部隊が編成され、実戦運用への第一歩を踏み出していました。

大戦景気にわくなか、八日市では陸軍飛行場の誘致運動が官民あげて行われ、大正10年（1921）に飛行場が開設されました。しかしこのころの日本は、経済恐慌・自然災害・テロが相次ぐ長い不況の時代に突入していました。

それでも日中戦争が始まるまでは、年に一度の飛行場祭りで市民に開放され、また滑走路で肥料用の草刈りが許されるなど、地元住民との親和的な関係が続いていました。

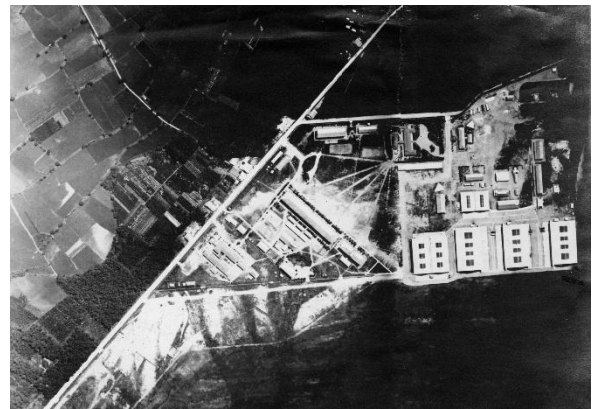


陸軍八日市飛行場全景（大正末期ごろ）〔奥村鮎子さん提供〕

陸軍八日市飛行場は、国内初の民間飛行場である沖野ヶ原飛行場が母体となって建設されました。沖野ヶ原飛行場は愛知県島川村出身の民間飛行士の荻田常三郎に由来する飛行場で、故郷に近い沖野ヶ原で行った試験飛行の発着場が発端となり、地元主体で建設されました。



陸軍八日市飛行場 飛行第三連隊（大正末期ごろ）
〔出雲一郎さん提供〕



陸軍八日市飛行場 飛行第三連隊（大正末期ごろ）
〔出雲一郎さん提供〕



陸軍八日市飛行場 飛行第三連隊正門（大正末期ごろ）
〔出雲一郎さん提供〕



陸軍八日市飛行場 飛行第三連隊本部と兵舎(大正末期ごろ)
〔出雲一郎さん提供〕



陸軍八日市飛行場 飛行場まつり 〔個人提供〕



陸軍八日市飛行場 飛行場まつり〔個人提供〕
陸軍八日市飛行場では、場内に創祀された中原神社の例大祭にあわせて毎年4月3日に「飛行場祭り」を開催し、市民や入営者家族に飛行場を開放しました。この時には、当時めづらしかった飛行機を間近に見学できただけでなく、模擬飛行、舞台アトラクションや兵舎のディスプレイ、伝統行事の大風揚げなどの催しのほか、露店もならんだにぎやかな祭りでした。

昭和の恐慌

第一次世界大戦で好景気にわいた日本は、戦争終結から2年後の大正9年(1920)に戦後恐慌、同11年に銀行恐慌、同12年に関東大震災、昭和2年(1927)に金融恐慌と、相次ぐ恐慌と災害に見まわれました。ニューヨークの株価暴落にはじまった世界恐慌(1929)は、翌年に農家の現金収入源であった米と生糸の価格暴落となって日本の農村を直撃し、さらに昭和7年(1932)には北海道・東北地方が冷害におそわれ大凶作となりました。

この昭和6・7年から、農村の経済事情は深刻な事態におちいりました。さらに、昭和8年には昭和三陸大津波、同9年には記録的凶作という自然災害が追い打ちをかけます。

政府は農業用水路・道路などの土木工事をおこして農家に賃金収入の機会を設ける一方、負債をかかえて疲弊した農村の「自力更生」を主導します。農業を指導する中堅リーダーの育成に取り組み、地域では島小学校(現近江八幡市)のように「郷土教育」を進めてきた小学校教員が村の自力復興に取り組みはじめました。

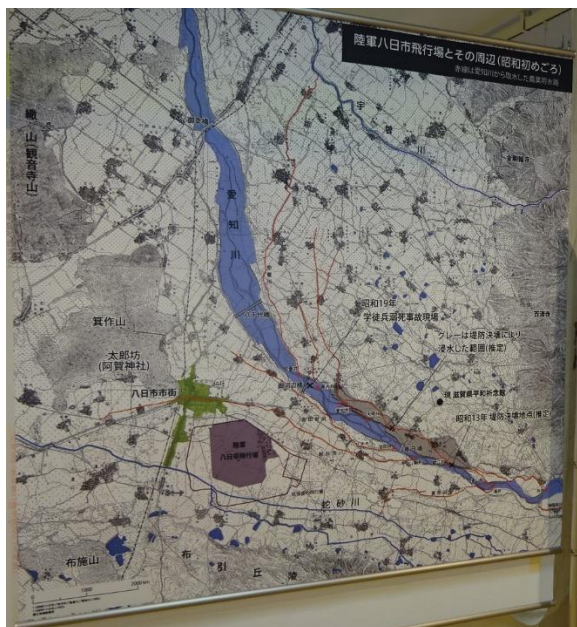
経済の不安は青年たちを政治・社会改革へ駆り立て、政財界要人に対するテロへとゆがんだ形に展開します。また、欧州各国が総力をつくした大戦を見た軍の中堅幹部たちは、米ソ列強との総力戦が戦える体制を構築しなければならないと切迫して考えはじめました。満洲事変(昭和6年)・5.15事件(昭和7年)・2.26事件(昭和11年)といった軍の一部が暴走した事件の背景には、政治・社会がかかえた深刻な問題に対する不安と不満がありました。

愛知川周辺の農村

愛知川流域では、「井(ゆ)」と呼ばれる取水口から引いた愛知川の水と、ため池の水を水田に利用しており、しばしば「水喧嘩」が発生しました。稲作以外に畜牛、煙草、茶などの栽培もおこなわれ、旧御園村では養蚕、旧角井村ではスイカ栽培がさかんで、重要な現金収入となっていました。

ところが昭和恐慌で農産物価格が暴落すると、現金収入が減った農家は借入金に頼らざるをえず、負債額は一年分の収入額をこえるまでに積み重なりま

した（昭和8年 旧角井村）。農家は作物の多角化や販路の拡大に努め、少ない機会をとらえて賃仕事や都会への丁稚奉公に出ました。そうしたなかで、陸軍飛行場に関連する職場は、地域住民にとって近場で安定した働き口でした。



バナー：陸軍八日市飛行場とその周辺（昭和初めごろ）



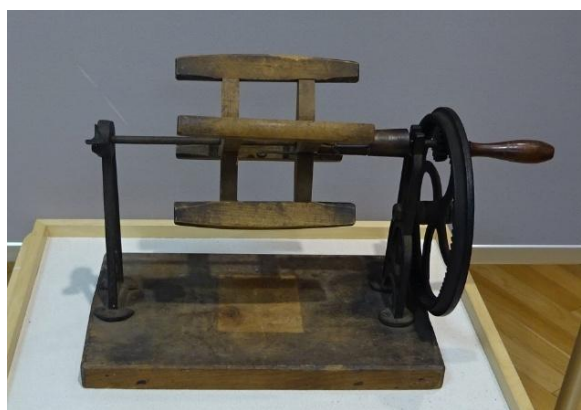
吉田井の取水口（『愛東の歴史』第三巻より）
〔協力 能登川博物館〕



上中野の茶園（昭和18年）『まちのあゆみ 写真集』より
〔協力 能登川博物館〕



角井すいかの収穫（昭和4年）『まちのあゆみ 写真集』より
〔協力 能登川博物館〕



糸繰り機 まゆから生糸をくり出す機械。
生糸は日本にとって外貨をかせぐ最も重要な輸出商品で、愛知川流域でも養蚕がさかんに行われ、農家にとっては欠かせない現金収入源でした。
ところが、昭和4年の世界恐慌によって生糸価格が暴落し、翌年には米をはじめとする多くの農産品の価格が下がったため、農家の収支は大変きびしい状態におちいりました。

第1章 大阪陸軍航空廠八日市分廠

飛行場には飛行部隊のほか、飛行機を整備・修理する部署が必要です。八日市飛行場では、駐在していた飛行第三連隊の「材料廠」と呼ばれる40名ほどの部署がその役割を担っていました。日中戦争が始まった昭和13年には、大陸の飛行場へ随時移動する飛行部隊と飛行場に張り付く地上部隊が分離され、それにもなって材料廠も「各務原陸軍航空支廠八日市分廠」とかわって飛行第三連隊から切り離されました。このころの分廠には、100名をこえる職員が働いていました。18年には大阪陸軍航空廠管下に改編されます。

分廠では軍人である将校・下士官が管理職となり、その下で多くの整備技術者が軍属として働いていました。軍属とは、軍人ではない軍所属の職員のことです。



八日市分廠の全工員（昭和14年）〔宮本喜造さん提供〕



軽爆撃機の翼上で〔宮本喜造さん提供〕



八日市分廠の女子工員（自動車工場前にて）

〔谷はつ子さん提供〕



作業服姿の分廠工員

〔個人提供〕

よい働き口だった八日市分廠

八日市分廠の整備技術者は一般から募集され、工員・雇員・技師という職階に分かれていました。周辺住民にとって、就職するなら京都・大阪の丁稚奉公しかなかったところへ、常勤でしかも自宅通勤できる働き口。最新機器をあつかう点でも人気が高く、優秀な人材が集まりました。分廠職員の多くは八日市周辺に住む人でしたが、周辺とはいえ北村正太郎さんや野村和男さんは10kmの道のりを自転車で通っています。

野村さんは軍属の身分でフィリピンへ派遣されました。拡大した占領地では多くの飛行場が建設され、そこでも多くの整備技術者を必要としていたのです。八日市分廠の職員は軍人ではありませんが、軍人同様に戦場へ行くことになってしまいました。



八日市分廠の動員学生（4 枚）

〔西村晃さん提供〕



ほか、軍用自動車や、エンジン始動時にプロペラを回す機械を積んだ自動車を整備する自動車工場などがありました。

戦争の激化にともなって駐屯していた教育飛行隊の隊員が増大すると、各務原から異動するなどして分廠も整備技術者が増えていきました。やがて、女性や動員学徒も工員として動員しはじめ、昭和 19 年には職員が 200 人をこえ、終戦のころには 1,000 人ほどいたかもしれないという人もいます。

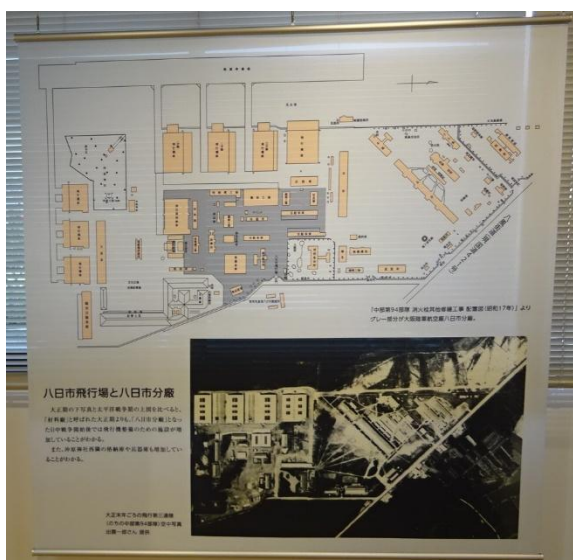


八日市分廠の工員〔小森章次さん撮影・提供〕



八日市分廠の格納庫

〔小森章次さん撮影・提供〕



パナー：八日市飛行場と八日市分廠

図は「中部第 94 部隊 消火栓其他修繕工事配置図(昭和 17 年)」より。写真は出雲一郎さん提供

八日市分廠の仕事

八日市分廠には機体工場・電精工場・発動機工場・整備工場があり、飛行時間が 200 時間に達した飛行機を分解して、機体・電気系統・エンジンごとに点検・整備し、整備工場で組み立てて試験飛行を行うという、オーバーホールの仕事をしていました。この

【体験談：八日市分廠】 小森 章次さん・Kさん
小森章次さんは御園尋常小学校を卒業したあと、昭和 13 年 4 月から八日市分廠に勤務されました。

私は、分廠に入ることを第一の希望にしていました。飛行機関係の仕事が魅力やっただんです。当時このあたりで分廠は最高の職場でしたんで、ある程度自信あるもんはみな受験したんです。さいわい同期生 10 名ほどと合格できたんです。入廠するまでは飛行第三連隊材料廠という名前やっただんです。

ほて、最初から機体工場の配属になりまして。こ

の頃の八八式偵察機や赤トンボ（複葉練習機）やらの翼は木枠に布を張ってましたんで、翼の破れたところへ布継ぎして塗料を塗ったり、胴体のジュラルミンの板金をしたり、二枚羽根の支柱を修理したりするのが私の作業でした。

昭和 19 年 5 月に現役で海軍整備学校に練習生として入隊したんですけど、分廠を出るちょっとまえの記念写真見ると、全部で 214 名（軍人 9・男子 200・女子 5）ですな。これが当時の分廠の全員の人数です。

愛知県河和の海軍整備学校では、5 月から 11 月までの半年間、毎日試験続きです。大きな軍需工場にいた人やら学校でた人やりましたけど、飛行機の整備について知識を持ってた人は私一人でしたんや。中隊長に「どこにいたんや」と聞かれて「陸軍で整備してました」と答えたら、ワイヤーの端に輪を作ってまき込んで止めるの（巻差し）、あれ教えよ、いわれて。

卒業試験では 1000 点満点で 999.7 点を取って、500 人中トップの成績で卒業できたんです。それで整備学校を卒業する時には、航空隊の司令から「優等賞状」をもらえたんです。



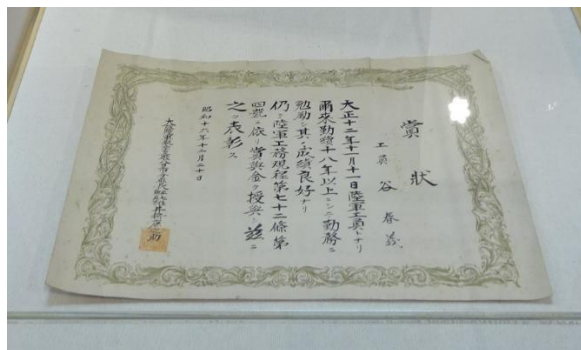
ワイヤーの巻差し

K さんは高等小学校を卒業して、昭和 15 年から八日市分廠に勤務し、発動機工場で仕事をしておられました。

分廠に入って最初の仕事は「弁すり」いいましてな、シリンダーの圧縮漏れを防ぐのに、（吸気・排気の）弁を抜いて弁座にカーボンをかけるんです。飛行機は、発動機・機体・電気系統に分解して、それぞれ修理が終わると整備工場で組み立てるんです。一通り終わるのに 20 日ほどかかるんですが、終戦前には 1 週間でやれ、いわれましたんや。

昭和 17 年に各務原からようけの工員が異動してきました。この人らは下宿して、そこから分廠に通ってました。発動機工場だけで 10 班、70 人～

100 人が働くようになりましたな。この頃から女性工員も増えてきました。



賞状 永年勤続賞 八日市飛行場の永年勤続賞状



八日市分廠工員募集

募集チラシの裏を再利用しているので、半分に分けて斜線が引かれています。

【体験談：飛行時計盗難事件】

宮本 喜造さん・細井 巖さん

宮本喜造さんは尋常小学校を卒業したあと、昭和 14 年に八日市分廠に入られました。

昭和 17 年頃のことやろか、飛行機に付けてある時計が 2 個、いつの間にか失くなったことがありましてな。分廠のなかで、ヤッサモッサの騒ぎになりまして、憲兵隊も来てましたんや。そしたら、工員全員に「飛行時計くらいの大さきの石 2 個、紙に包んで箱の中に放り込め」というて、上の方からいうて来たんです。みな、石ころを紙に包んで放り込んだら、そしたらそのなかに、飛行時計を包んだのが混じっていた、ということですわ。犯人は結局わから

んかったんですけど、事件はこれで解決したんでしょうな。

細井巖さんは特別攻撃隊の一員として、昭和20年6月から八日市飛行場に待機しておられました。写真はその時に撮ったもの。

（首にかけている）これは飛行時計なんですよ。飛行機を掩体壕だとか畑の中に入れとくでしょ。そうするとね、やっぱり悪さするやつがいるからね。で、もうみんな外せてことで、外して自分の飛行機の飛行時計を持って、胸に下げてました。

本来は飛行機の中に付いてる。だけど、格納庫に入れてるわけでもないから、自分の飛行機の物は無くさないように自分で持て、ということで。これ、みんな自分で持ってるの。無くなることってあるんだよ、放つとくと。ほかの計器だって、ねらってるやついるんだから。

※当時、飛行機は空襲を避けて掩体壕や林の中などに隠していて、ねらわれやすい格納庫には入れていませんでした。



八日市に待機していた時の細井さん【本人提供】

【体験談：八日市に飛来したドイツの急降下爆撃機】

小森 章次さん

私は、当時としては珍しく自分のカメラを持ってたんです。分廠で撮った写真も自分で写したんです。

弁当箱の中にカメラを入れて持って行って、飛行場に変った飛行機が来たら格納庫の扉の隙間から、そっとシャッターを切るんです。そのうちの一枚がこれで、日本陸軍がドイツ空軍から2機購入したっていう「Ju87A-2」ですにやね。そのときは、そうと

は知らんと写したんやけどね。ずっと後になって、それが非常に珍しい写真やてわかってね。その当時は、こんな写真を撮っている現場を見つけれたら、軍法会議ものやったかも知れません。その他にも、アルバムに収めてある写真は、ぜんぶ自分が撮影したものです。そやから、わたしはちっとも写ってませんのや。

※Ju87A - 2

ドイツのユンカーズ社製の急降下爆撃機。第二次世界大戦の前半に活躍しました。主翼が前に屈曲する特徴をもち、急降下時に風を切るサイレンのような音が恐れられました。



八日市飛行場のドイツ製急降下爆撃機

【小森章次さん撮影・提供】

【体験談：八日市分廠落書き事件】 Tさん
憲兵として八日市分遣隊に配属されていたTさんは、落書き事件のことを先輩から聞いてよく知っておられました。

「分廠落書き事件」は私の赴任前におこった出来事で、直接見聞はしていないが、先輩の憲兵から何度も聞いてよく知っている。

昭和18年の終わりのころから19年始めにかけての出来事だったが、分廠の便所の壁に鉛筆で「天皇を殺せ。皇后を女郎にせよ。皇女を売春婦にせよ」、そして、確か「わが、愛するソビエト」などという言葉も書かれていたという。当時の分廠所長の小川少佐は、部下からこの落書きについて報告を受けたが、「すぐに消せ。憲兵隊に知れたらたいへんや」ともみ消しを指示した。しかし、そのうわさは八日市憲兵分遣隊の耳に入って、結局は取り調べをうけることになった。

事件のあと日がたちすぎて、落書きは消されているし、鉛筆も残されていないから、調査の進めようがない。それでも、憲兵分遣隊の特高係2名が中心になって捜査がはじまった。分廠で少しでも素行のおかしい者、たとえばボタンを外しているとか、そういう者を取り調べの対象になった。以前、八日市中学校でストライキがあったので、その卒業生は「危険思想の持ち主が多い」と疑われた。分廠の工員には大がかりな筆跡調査が行われた。じつは、落書きはすでに消されていたから、筆跡調査には意味がなかった。心理作戦として行われた、ということだった。

そんななかで、特高係が従業員の出勤簿を調べると、落書きのあと2日間の休暇をとった人がいた。事務職のその人は八日市中学校の卒業生でもあったから、これはおかしいということになった。

分廠の職員を外に集めて閲兵し、憲兵隊長が一人一人の顔を見てまわると、その人の目が動いたそうである。これだけでは決め手にならないけれど、隊長は「午後10時になったら憲兵隊庁舎の明かりをつけよ。その男の家へ土足で踏み込め。そのまま何も言わずに連行せよ」と命じた。

深夜、こうこうと明かりの灯った庁舎に連れて来られたその人に、「いらんことをしくさって!」と隊長が一喝すると、その人は思わず「すみません」と謝ったそうで、これで落書きの犯人が確定できた。ここまでの捜査に半年ほどかかったそうである。

逮捕された人はすぐ軍法会議にかけられたそうだが、その後どうなったのかは知らない。八日市憲兵分遣隊は、この件で表彰を受けたそうである。

【体験談：落書き事件で憲兵に連行された小森さん】

小森 章次さん

分廠の便所に不敬な落書きが見つかったのは、昭和18年末のこと。海軍の整備学校に練習生として入隊（昭和19年5月）する少し前の話です。

分廠の仕事を終えて帰ろうとしたら、憲兵隊へ連行されてすぐに取り調べしてね。「お前がやったんやろう」と尋ねられるんやけど、なにを聞かれているのかさっぱりわからへん。知らん、ていうと、私の指の間に六角形の鉛筆をはさんで、指先をつかんで

鉛筆をぐるぐる回しよる。これが猛烈に痛とうてね。ほんで算盤の上に座らされるし、膝の上に石をのせられるし。ほんでまた尋問。目の前で軍刀を抜いて「お前がこれから行く部隊へ報告しておくからな」というてね。その日は家帰るのに憲兵がついて来よって、家族には友達のようなふりして、私の部屋の持ち物を調べていきよったんですや。そんなんが2〜3日続いたかな。連行される前に工員全員に筆跡調査があつて、私の「御」の字が落書きの字に似ていたらしくて、それで引っ張っていきよったて。ほの結果、あとどうなったとか、まったく音沙汰ないんやけど、私のほかにもこんな無茶な取り調べを受けた人がいたと思いますわ。



陸軍気象部八日市気象観測所

〔個人提供〕

【体験談：陸軍気象部八日市気象観測所】

Iさん・Fさん

陸軍気象部八日市気象観測所は、飛行場の航空気象観測と気象部技術要員の育成のため、昭和15年に八日市分廠の正門前に設置されました。ここにも地元の方が軍属として就職しています。

○神崎商業学校卒業後、昭和17年1月に気象観測所へ入ったIさん。

私の同期では神崎商業から3人、八日市中学から1人、栗太農業から3人、入所しました。はじめの3ヶ月は週一回の気象学の講義と実習訓練を受けて、それから実務につきました。そして2〜3人ずつ東京の陸軍気象部技術要員養成所へ3ヶ月の研修を受けて、各地の観測所へ配属されるんです。

八日市の観測所では、4時間おきに露台に出て天

気・風向・風速・気圧・気温などを測定し、観測データを数字に組んで八日市郵便局から電報で東京の陸軍気象部本部へ報告。とくに10時と18時は雲形・視程・地中温度・草上温度・湿度なども記録するんです。打電したデータは、本部が全国の300ヶ所の観測点のデータをまとめて、また全国にモールス信号で無線放送するんです。大東亜戦争が始まったら暗号電報になりましたので、暗号組みと解読に苦労しました。

朝6時と昼2時の放送を受信して天気図を作って、それを見て所長が天気予報を出すんです。それを朝8時半と夕方4時半に、八日市飛行場の94部隊と98部隊の将校室へ持っていくんです。94部隊が何時に飛行すると知らせてきたら、気球を上げて上空3000mの風向風速の測定をやる。ときどき3倍くらいの気球でゾンデを上げて観測しました。

私は18年10月に入隊して南方でも天気図を描きましたが、そうやって男は出征していったので、観測所では付近の女性を採用して養成所卒業者が教育してました。それは天理教の八日市大教会でやってましたな。

○愛知高等女学校在学中に学徒動員で気象観測所へ入った旧湖東町のFさん。

女学校の時に気象観測所の募集があったんです、学徒動員の。そこではモールス信号を受信してたんです。暗号の数字が送って来るさかいに、(解読表の数字を)足し算して、その数字を文字に替えるんです。でも、どうやってたかな。それを天気図に描かはるんやけど、難しいことは男の人がしてはったな。女子は日野高女と愛知高女が混じってて。そのうちそこではしてられへんようになって、疎開しました。小田刈の丁子屋さん(屋号。現近江商人郷土館)とか「ちちや」さん(料理屋)に機械とか運び込まはって、そこでやってました。

八日市飛行場の飛行機事故

陸軍飛行場の前身の沖野ヶ原飛行場の建設に尽力した飛行家が相次いで事故死した経緯があったにもかかわらず、八日市町で誘致運動が盛りあがった際には、飛行機事故を憂慮する声はあまりなかったようです。

陸軍飛行場建設直後から、離着陸に失敗した事故はたびたび起きたようで、写真からその様子がうかがえます。

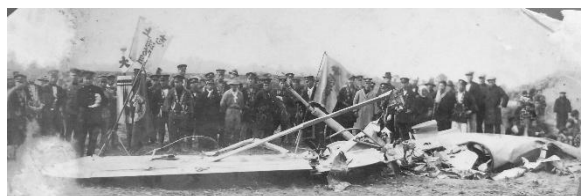
太平洋戦争の戦局が悪化したところに分廠に勤務した人によると、事故は2日に1回程度の頻度でおこったといいます。

事故の記録は残されておらず、図は近隣住民に記憶された事故地点です。



八日市飛行場周辺の飛行機事故

小森章次さんとNさんの証言と『軍都の轍より』(中島隆一1993)に記録された事故。全体のごく一部であろう。



飛行機の事故

〔森 好敏さん提供〕



飛行機の事故

〔森 好敏さん提供〕



飛行機の事故

〔森 好敏さん提供〕



飛行機の事故

〔森 好敏さん提供〕



飛行機の事故

〔出雲一郎さん提供〕



飛行機の事故

〔出雲一郎さん提供〕



石碑「留魂」(東近江市)

〔当館撮影〕

昭和 18 年 12 月 27 日、長谷野爆撃演習場で訓練中の引地尚志・市川健二両少尉の飛行機が墜落し、殉職したことをあらわす石碑。長く草叢に埋もれていましたが、工場用地造成中に発見され、現在は移築整備されています。

【体験談：神田の学徒兵溺死事故】

Ｙさん・

村田 雪子さん・滝田 昭一郎さん・小森 章次さん
飛行場の周辺では墜落事故の他にも、昭和 19 年に愛知川で実施した夜間の渡河訓練中に 3 名の溺死者を出す事故が発生しており、救命作業には地元住民がかり出されました。

Ｙさん：ああ、学徒出陣の人か。

村田さん：学徒出陣だけの人ではない。もっとみんな一緒やと思う。航空隊の人。ほれがな、何人亡くならはったかはな、みんな分からへんの。流された兵隊さん、土手のどこへ並べはりましたやろ、水から上げてきて。水飲んでよりはますやろ、ほいでガーガーと出さはりますわな、水を。ほてそこへ行った私たちは、この舌がエエッと縮んでいったらあかんさかい、「引っ張ってあげてくれ」いわれて、4 年生の子どもやけんど舌を引っ張るとくねん。それははっきりと覚えてるわ。

滝田さん：御河辺橋のどこや。橋を渡る（右岸の）上やな。ここにな、淵ができたんやわ。ほんでここで、小銃を頭に上げて渡ろうとしらったら流れやってん。この愛知川はやな、足取り川ちゅうて砂ばかりで、水が出たら足取られるんやわ。

村田さん：上で雨が降ったんや。朝が早うて暗いから、水かさが増えたのがわからなんだんやな。

滝田さん：ほんで、わしらが行った時分は、この淵

にやな、8 メーターか 10 メーターほどの足場板にロープつけてよ。下へ下がっては、みんなが引引っ張って上へ引きずりして。この板の上からやな、魚つかみの水中めがねで見て探してはった、ほの流れた小銃を探してはったんや。

村田さん：橋の上からな、親がな、あの花束をな、愛知川の川へ。ほれも見とくにやわ。都会のお方やからみな上品な人らやったわ。ほのほんでに、胸にこう遺骨持って。

小森さん：この飛行場の中に火葬場がありましたな、薪で燃やす火葬場や。ほんでに遺骨にしとかはるんやな。

*** この事故は記録に残されていませんが、『学徒出陣』（蜷川壽恵著 吉川弘文館 1998 P. 86）に概要が短く紹介されています。**

「滋賀県八日市にあった第 8 航空教育隊での出来事であるが、厳しい錬成を目指す教官が、19 年 3 月末のある日の未明に非常召集を行なって幹部候補生を完全軍装させ、近くの愛知川で渡河訓練を行った。（中略）流される候補生も多く出た。候補生同士で助け合って岸に上がったものの、溺れる者も出て、救急措置の甲斐もなく、3 名の候補生が終に不帰の客となった。」

【体験談：入廠 3 ヶ月でフィリピンへ派遣】

野村 和男さん

昭和 19 年 4 月に 15 歳で八日市分廠へ入廠した野村和男さん。3 ヶ月の特訓のあとフィリピンの飛行場へ派遣され、フィリピン戦に巻き込まれました。

もう終戦の前の年ですんやわ、3 月に入廠しましてな。ほこで厳しい、飛行機の構造から何やかや、猛特訓を受けましてな。そんで、6 月にはフィリピンへ行くようになったんや（笑）。

ほの 3 ヶ月は、飛行機とエンジンの、いかいエンジンですさかいな、星型発動機やけ。その構造を覚えんことにはいかんので、ほれで毎日学科ですんにゃ。エンジン外して、軽油みたい洗うて、ほて古参の雇員がちゃんとエンジンを組み立てる。ほういうような仕事したりして。それから、試運転しますんにゃわな。けどそんなもん、日が浅いもんやさかいに、飛行機を習うのだけが精一杯です。

八日市へ家から通ったんです。百済寺、池之尻から上岸本ですな、あっこまでは全部山。これがガタガタ道のような、山道みたいもんで。もう物騒なようなところでしてん。そこを自転車ですよ。どこも行かんもんは、空気のないタイヤで走ってたけど、ほういうとこ行ってるものは配給がありましたさかいに、普通タイヤで。ほれで毎朝通いましてな。

ほれから、夜勤もありますさかいに。夜 10 時過ぎくらいに帰って来まして、明るく日はまた 4 時ごろからまた向こう行くと。最終的には交替制ゆうのがありましたな。

フィリピンへ行ったのは八日市管轄で 12～13 人くらいやったかなあ。私らから徴兵検査で兵隊へ行くまでの人。南方ではもう戦死者がどんどん出ますいうて、人が足らんさかいというこで。とにかく人さえあつたらどんな人でもよいさかいに、ほこへ人を運ばなあかん。もう昔のことですさかいに、命令が下つたらとにかく行かんならん、断るわけにいかんさかいというて。長男やったさけ、父親はがっかりしはってん。

門司から出航し、船団の一隻を魚雷で失いながらフィリピンに到着した野村さん。ミンダナオ島カガヤンで飛行場づくりに従事していましたが、やがて空襲が激しくなり、米軍上陸の情報を受けてジャングルへ逃げ、捕虜となって収容されてから、日本へ復員されました。



工員細部心得

【体験談：軍属として、飛行機整備に従事】

北村 正太郎さん

昭和 16 年 4 月、秦川高等小学校を卒業して八日市分廠に就職した北村さん。14～19 の年齢で、終戦ま

で軍属として勤務しました。

各務原陸軍航空支所八日市分廠に軍属として入廠してから3か月間基本的な教育を受けて、ざっとした試験を受けて7月から整備工場に配属された。3か月間は同期生がみな教育を受けるにやわ。機体工場やとか整備工場やとか発動機やとかいろいろあるけど、整備工場に入った。

ほて昭和17年3月まで1年いてて、昭和17年4月1日、各務原陸軍航空廠技能者養成所生徒隊第2中隊第6区隊第5内務班に、第2学年として編入する。各務原の技能者養成所やわ、生徒隊。

昭和18年の12月1日付を以て、大阪陸軍航空廠に転属した。それはちゅうのは、大阪にはなかった航空廠ができたで、近畿管轄の者は大阪へ転属した。昭和19年2月24日、大阪の技能者養成所第3学年を卒業。

ほれから3月1日から元の八日市の整備工場へ入って、後輩を指導して。

昭和19年の6月、今度空輸班ちゅうもんが編成されて、そこへ入るにや。部下は20名ぐらいやな。西明石で川崎航空機が「キ45」ゆう戦闘機（双発複座戦闘機「屠龍」のこと）を製造しとったんや。そこから八日市へ空輸して来よるわけ。その飛行機を空輸班が預かって、戦地から取りに帰って来よるにや、操縦士が2名とか。空輸班の任務ちゅうのは整備してちょっとしたできた飛行機を引き渡すのが目的や、空輸班の。取りに来た操縦士は試験飛行して時間飛行して、それでよかったら外地へ出発してしまう。試験飛行は約40分から45分や。それパスすると時間飛行する、2時間ほどエンジンを馴れさせるために。

八日市から九州まで飛びよるのやろな。ほて南方へ行く場合は台湾へ行きよるやろ。10機持って来ても台湾に着くのは3機ぐらいで、途中でエンジンがみなあかんようになった。大量生産やし、もう終戦前で技術者がおらへんさかい、あかんにやわ。ほやからいつ飛行機が傷むか分からんで、機関砲とか装備はしてない。わしらは「何日までに整備完了」ていうのがあるやろ。ほんでもって忙しいさかい、家へもんれーへんにや。徹夜してでも飛べるようにせんらんでな、操縦士は待っとーるにやさかい。

操縦士も足らんし、結局飛行機も足らなんだんやろな。飛行機は作ったさかい必ず完全に飛べるかゆうたら、そんなわけやないにやわ。



機関砲附属品

第2章 増産と供出に追われた村



戦時下の農業と災害

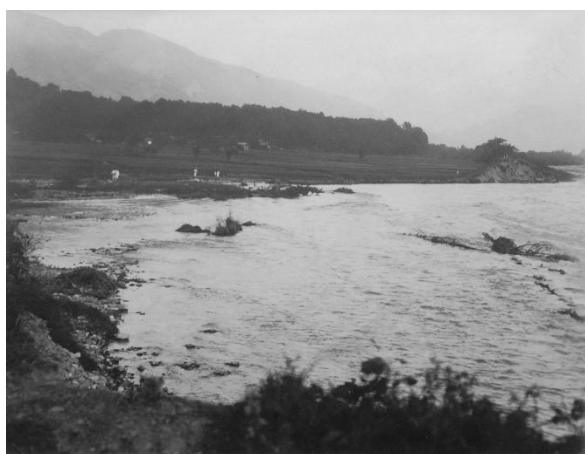
世界恐慌の影響が一段落すると、昭和12年の盧溝橋事件で日中戦争がはじまり、翌13年には国家総動員法が公布されて、戦時体制に突入しました。

昭和14年、朝鮮半島と西日本一帯は干ばつに見まわれ、この年は東南アジアの輸入米に頼らざるをえなくなりました。こういった状況をふまえて、昭和17年には食糧管理制度がはじまります。小作争議の問題でも生産者である小作者重視の施策へ転換していきました。これらは自由を制限する統制施策でありましたが、食糧配分や農業経営において平等化をすすめる施策でもありました。

戦時下でも、農業が自然災害に脅かされることには変わりはありません。昭和13年8月と9月の台風では、愛知川堤防が2度決壊しました。同16年の台風では野洲郡で天井川の家棟川が決壊しました。どちらも広い範囲で住居と水田が冠水しました。農家

では出征と動員で青年男性がおらず、政府から食糧の増産と供出の圧力を受けながら、こうした自然災害とも戦わなくてはならず、また政府も食糧増産の障害となる自然災害には対策を打たざるをえませんでした。

愛知川の堤防復旧と家棟川の部分改修は早急に実施され、また食糧増産に直結する施策として、内湖干拓による農地拡大、および野洲川・犬上川・愛知川などに農業用ダムを建設して灌漑用水を安定させる事業が計画されました。しかし、そのほとんどは戦後になってから着工・完成しており、戦中のうちに完成して運用できたものはわずかしかなかった。



愛知川堤防の決壊（昭和 13 年）

『愛東の歴史』第三巻より〔協力 能登川博物館〕



決壊した堤防の復旧（昭和 13 年）

『まちのおゆみ 写真集』第三巻より〔協力 能登川博物館〕



昭和 13 年の水害で一部が沈んだ春日橋

『愛東の歴史』第三巻より〔協力 能登川博物館〕



展示品：田植え縄、耒探し、苗かご、ざる、ほうき、ちり取り
ポスター（写真）：「大東亜戦争に勝ち抜かう」「戦ふ菓工品は我らの手で」「精神作興週刊」「国民精神総動員」「全村をあげて松根赤だすき」



左：国民精神総動員家庭実践心得（雑誌『家の光』附録）

右：会誌『ほまれの家』第 15 号（恩賜財団軍事援護会発行）

農家の人手不足

戦時生活の苦難は物不足という消費者視点で語られがちですが、生産者視点から女性・子供・高齢者が普通以上に働かねばならなかったことを見逃してはなりません。農村部でも人手と物資の両方の不足で苦しみました。

政府が計画する全国民へ配給する米穀等を確保するため、村には増産・供出計画が割り当てられます。さらに「自主的」に供出増量を強制される場合もあり、足りない分は農家保有米を削らねばなりませんでした。さらに、薪炭のような配給対象物資も、農村部で割当を供出せねばなりません。

出征兵士を出した家を手伝う銃後奉公会、農地拡張や農作業にたずさわる食糧増産隊・農業増産報国推進隊などの動員にも応じねばなりませんでした。こうした組織は学校や村を通じて軍隊式に編成され、上意下達で確実にノルマを達成することが求められました。

長浜農学校と農業教育

藤川誠一郎さんが通った長浜農学校は、当初から県立で設置された県下でもっとも古い農学校で、台湾・朝鮮からの留学生も受け入れていました。その熱心な教員だった一色重夫先生は、藤川さんが語るように、多くの教え子の記憶に残っています。

「報国農村戦捷大会」は、銃後の望ましい農村経営を1年にわたってモデル的に実施させる事業だったようで、藤川さんが担当して神田（東近江市の町）が名誉総裁賞を受賞したその前年には、現近江八幡市の武佐が農林大臣賞を受賞したそうです。神田へ講演に来た山崎延吉は、愛知県立農林学校の初代校長で、所在地の安城を「日本のデンマーク」と呼ばれるバランス良い農村地帯に育てた実績から、農業経営の神様のように尊敬された人物です。



小学生による農作業（3校）

【木津龍尊さん提供】

【体験談：神崎郡農会技術員の藤川誠一郎さん】

藤川 誠一郎さん

県下の伝統ある長浜農学校を昭和17年に卒業した藤川誠一郎さんは、神崎郡農会に就職して、郡下の村々の農業指導にあたりました。

長浜農学校では毎日7時間授業です。農業科の学生50人が5人ずつ、3町（約3万㎡）ほどの特別農場へ季節関係なしに一週間ずつ泊まりに行くんですよ。5人で農家とおんなじ生活するんです。その担当が一色重夫さんという、九州の国立試験場の技師やった先生。ほらほんで、厳しかったけども私ら腕上がりましたね。学校退けて、風呂焚く人やら、炊

事する人やら分かれてね。ほて、食事のあとまた 2 時間講義なんですよ。朝は 1 時間早う起きて農場の世話したり。学校の教科書でなもんほったらかしでね、東京の養賢堂（農業関係の出版社）の本を買って勉強してました。学校の成績はぎりぎりであえと。

神崎の郡農会へは父の同級生の方の紹介で就職したんです。当時は各町村に郡農会から 1 名ずつ技術員が派遣されておりました。青山から神田を通して五個荘の竜田まで(約 10km) 自転車で通ってたんです。秋には、五個荘から山上の奥の和南に台風のあとを調べに行って、また五個荘へ帰ってね、ほいであんた、青山の家へ帰って来るにや、自転車で。道はガタガタ道でしょ。ほんなんして農業の技術指導に回るんです。ほら、ずいぶん苦労しました。

中部日本の範囲で神田をモデル村に選んで、報国農村戦捷大会ちゅうのをやりましてね。戦争に行かれて希薄な人員のなかで、この村をどういうふうな農業で支えていくか。ほいで、子どもの育成も大事だちゅうことで、託児所つくったり、女子青年の人の研修会やったりね。いろんなことやりまして。ほれを 1 年間やったんですよ、国からは山崎延吉さん（安城を”日本のデンマーク”に育てた農政家・教育者）呼んで、3 回講演してもらて。ほて大会して、ほの実績を徹夜で書いて、ガリ版して送ったんやね。ほしたら、名誉総裁賞くれはった。副賞の 500 円、神田の人ら 1 日総出で宴会しはったな。

ほかにもね、おんなじ技術員の畜産の人が兵隊に行きましてね、替わりに畜産を受け持ったんですわ。ほとね、軍用兎の供出いうてね、ウサギ。7 町村から出してくださる人を 7 人の技術員がね、いかい(大きい) 籠の上に網張ったのにウサギ放り込んでリヤカーで持って来はるんです。ほんで郡農会の横っちょの空き地で毛皮はいで、軍へ納めるんです。頭はほかして、胴の肉だけお返しするんですわ。いつもは専門屋さんを頼んどくんですにやけど、1 回だけ来られな。ほんであんた、「若いもん 2 人でやれ」いわはって、ウサギ 100 匹あまり毛皮をはぎました。この日は多かってね、ほら弱った。



「兎は大切な軍需品」

『写真週報』第 188 号、昭和 16 年 10 月 1 日発行

【体験談：神崎農学校の教員になった藤川さん】

藤川 誠一郎さん

神崎商業学校は昭和 19 年の入学生から農学校に変わりました。知事の肝いりで教員に抜擢された藤川さんは、一から農学校を立ち上げます。

郡農会のあつたところ、いまは五個荘のコミセンになってます。ほの差し向かいの五個荘中学校ちゅうの、あれが昔の神崎商業学校。それが昭和 19 年に農学校に変わったんですにやね。彦根高商はなくなるしね。大津商業も工業に変わったと思います。古うからの八幡商業だけですわ、残ったんは。

ほいであんた、1 年ほどしか郡農会にいてへんのね、これから変わる神崎農学校の先生になれ、いわれてね。「ほんな資格はない」いうたんやけど、「知事がおまえに絶対なつてほしいっていうてはる」「一色重夫先生の門下やったら、大学以上の勉強ができたある」て。ほいで栗太農学校の教頭さんと農場主任とで、3 人で農業科の 2 クラス、それで 1 年やりました。

戦争中で人がいないんで、学校の前に田んぼが四角に 1 町 (約 1 万 m²) ほどあいてんの、それを県が買って学校の農場にしましてね。知り合いの家から牛と唐鋤借ってな、私がみな鋤きましたんや。朝 1 時間ほど早う来てな、生徒が来よるまでに 1 反ぐらいつつ鋤くんです。

助手はね、栗太から 3 人来てくれましてん。4 人がリヤカー引っ張って、八日市の県農会分室へ行って、倉庫の隅に置いたる発動機やいろいろなもん

「もう使わへんやろ、学校へ寄付してくれよ」いいもってもろて帰った。

農舎やら牛舎やら建てなあかんちゅうて、県行っ
て出してもろてね。みな私がもらいに行った。けん
ど、牛舎に入れる中身がないわな。しょうがない、
長浜へ走りましてね「校長さん、牛1匹おくれ」い
うたら「ほら協力しよう」いうて、真っ白の乳牛を
1匹。ほたらね、郡農会でお世話になった博労さん
(牛馬の売買・仲介業の人)がね、自転車で長浜ま
で行って、牛追うて連れて帰ってくれはった。

果樹園は、運動場が広いから半分手で溝掘ってつ
くってね。日野に長浜農学校の演習林あって、間伐
して皮剥いだの積んでますにや。ほれ思いついて、
また長浜へ行って「あの木、もらいに行つてええか」
って。ほて、八日市の県農会の自動車借って「積み
るだけ積んでいのう」いうてな、それを果樹園の棚
にして。ほうやって、資材は全部ひとに助けてもら
いました。

私はね、昭和20年の徴兵検査で甲種合格でござ
いましてね。ほしたらTさんちゅう軍籍のある方が
「知事の嘆願書によってね、おまはんのは軍籍免除
にしてある」ていわはった。欠かせん人間やからっ
て、私には言わんと。

ほんで、終戦してから、昭和23年の春まで先生し
てましたんや。



神崎商業学校（のちの神崎農学校）

『五個荘町史』第二巻より〔協力 能登川博物館〕



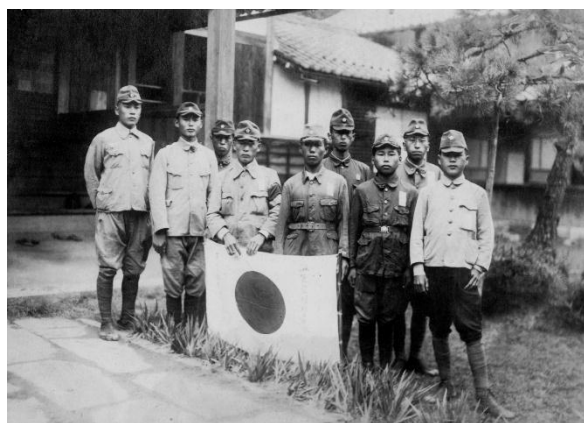
チラシ（左：やまと化成肥料三號、右：大日本化成八号肥料）

食糧増産隊

農村部の青少年を対象に農業報国会が組織した少
年農兵隊で、おもに開墾などの農業土木工事に従事
していました。

昭和18年6月4日の閣議決定『食糧増産応急対
策要綱』において食糧増産隊の組織が指示され、政
府施策の一環として全国で結成されたようです。応
募者は満蒙開拓義勇軍と同様に茨城県内原訓練所、
または滋賀県では饗庭野で1ヶ月の訓練を受け、そ
のあと県内各地の作業に従事しました。

1年ごとに結成・解散した組織でしたが、高瀬昇一
郎さんは19年4月から2年参加し、干拓工事など
に従事されています。また、甲賀市和野では、ため
池の堤の復旧工事中に土取り場で落盤事故が発生し、
堀井市朗兵衛さんほか2名が亡くなっています。



食糧増産隊記念写真

〔Hさん提供〕



食糧増産隊記念写真

〔Hさん提供〕

【体験談：食糧増産隊に参加して殉職した兄】

Hさん（堀井市朗兵衛さんの御遺族）
甲賀市和野のため池の堤防を復旧するため、食糧増産隊が動員されました。そこで12歳年上の兄市朗兵衛さんが事故に遭い、亡くなっています。

昭和18年ぐらいに内原訓練所から出てきて、増産隊の仕事に入ってたんと違うかな。わしがちょうど6才のときやでな。内原の訓練所へ行って帰りしなに、半ズボンを買ってきて、そこの板の間でわしに半ズボンはかして、「似合うわ」言うて着せてくれよったのを覚えてるぐらい。

殉職したのは、昭和19年1月21日。場所は水口の和野。島口さん（旧志賀町）と田中さん（野洲市）とうち（堀井市朗兵衛さん、大津市）の3人が殉職や。

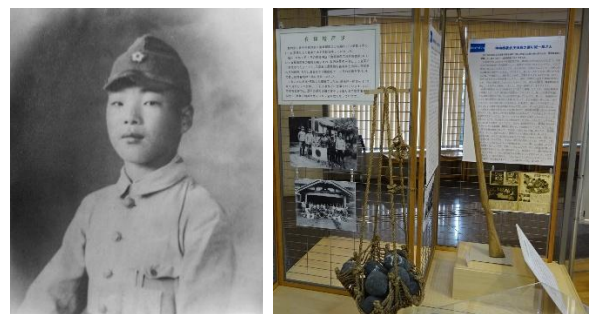
事故は落盤、土取り場で土砂の下敷きや。山の麓を掘って、上から杭打って、だっと落として、それをトロッキに入れて運ぶゆう。そのどさっと落とすのが落ちなんださかい、奥へ入って行って中をこそねてる間に、上からだっと落ちたんや。

当時、殉職になったそのお葬式は、学校と自宅であった。自宅の葬式には菊池盛登知事も来られてる。家の前で記念写真を撮ったのが残ったる。

現場にはこんだけの石碑が建ってある。その当時は佐山村やったな。いまでも、石碑も池も現存している。和野の方には、宿舍をしてはった責任者みたいな人がいやはるんやわ。隊員を家庭に泊めて、朝ご飯食べさせて送り出すゆうな。そこの町内に修善

寺というお寺があるんやわ。殉職になったときは、そこでお通夜してもろて、いまだ毎年のお盆にはそこのお寺へ参らしてもろてるんや。寄せ書きもあるし、殉職された写真まで掛けて残しといってくれはる。50年の年忌もそこでやってくれはった。

うちの親にしたら、碑も建て、遺体も自分とこへ帰って葬式もできたと。戦争で亡くなったら骨も帰ってこうへんような当時としては、逆に幸せやったというのが、親父らの気持ちや。けど、腸がはみ出た、キャラメル箱が見えてたという話は親からいやというほど聞かされてる。どんな思いで連れて帰って来たんか、と思うわな。



堀井市朗兵衛さん〔Hさん提供〕

もっこ・木銃

【体験談：和野の土砂崩落事故】

Tさん・Nさん

堀井市朗兵衛さんたちが亡くなった土砂崩落事故について、地元和野の方々の証言です。

和野で事故が起きたときは小学生やで、ここにいた。台風で大阪池いう溜池の堤防が決壊しましたんやわ。家へ入るくらいの水が来ました。

ほれで、池に水がないと米がとれん、早う直さんとあかんゆうことで、佐山村じゅうから一般のものが来てくれましたんや。ほこへ食糧増産隊が助けに来てくれはったゆうかつこですにや。食糧増産隊は天理教の教会で泊まったんですわ。風呂がないんで近所の子の風呂にいったはった。

池のこっちに山がありますわ。その土を取って、堰堤を築いてはったんです。その土が崩れたんです。生き埋めみたいにならはったんやわな。時間は午後の4時頃やと聞いてるけんどな。

和野はじまって以来の出来事ですにやわ。当時、区長はたしか藤井伝八さんゆう人がしててくれはって、責任感じてな。「わしも一緒にあっこへ埋めてく

れ」言うて。ずうっと、みなが押さえてはったな。

事故のあと、第2次隊が来やはりまして、八幡神社の社務所に泊まってはった。もう、泊まるところがありません。**〔和野にお住まいのTさん〕**

増産隊員が何名来ていたかは、はっきりとは知りませんが、うちにも6~7人宿泊してました。事故の日、増産隊の隊長は県での打ち合わせに行っても留守でした。生き埋めになった人は6人で、そのうち3人が亡くなられ、3人が怪我です。怪我の人は甲賀病院へ運ばれて、亡くなった3人のお通夜は集落内の修善寺で行われました。そのあと2月経って、事故現場に石碑が建てられたんです。

戦死者やったら、甲慰金やら年金、そういうもんあるやろうけど、なんにも出でなと、この人らはかわいそうやなて、後でみんなが言うたんは覚えてますけどな。石碑のとこも掃除に行ってきたにして。初めのうちはお勤めをおっさん（住職）にしてもろたんやけど、だんだん年が経ってくるし、それもないようになって。

〔和野にお住まいのNさん〕



「殉職農士顕彰之碑」甲賀市和野〔当館撮影〕 石碑拓本

内湖の干拓・用水ダムの建設

古くから農業先進地であった滋賀県は、食糧増産のために農地を拡大する余地は多くありませんでした。自然災害の被害を防ぎ、抜本的に農地拡大をはかるためには大規模な土木工事が必要で、内湖の干拓と農業用ダム工事の多くは、このころに計画されました。

琵琶湖に付属する内湖は、早くから干拓用地として注目されていて、入江・松原・水荃・野田沼・繁昌池・大郷・塩津・四津川・貫川の内湖で工事が計画され、昭和18年に野田沼で着工したのを皮切り

に19年までに全地区で着工されました。この工事には県内外の中学生・師範学生をはじめ、食糧増産隊や奉仕団が従事し、入江・小中の湖（伊庭内湖）・野田沼では英米蘭豪・インドネシア・ニューギニアの捕虜も使役されました。真冬に足を水につけて作業を進めたこともあったといいます。しかし、終戦までに完成したところはなく、ごく一部の完了区域で耕作を始められただけでした。

湖東平野の水田では、愛知川などの大河川に「井（ゆ）」を設けて取水していましたが、この水の分配をめぐる「水争い」が絶えませんでした。そこで、用水時期までに上流で貯水するダムを建設する計画が戦中に立てられます。計画されたのは、犬上川・野洲川・芹川・大原川・愛知川で、いずれも戦前・戦中に計画されましたが、一部が着工するにとどまりました。

こうした農業基盤整備の事業には時間と労力がかかります。上記の干拓とダム建設は、戦時だけの計画倒れにとどまるのではなく、戦後も事業を続けて完成させ、農業の近代化をすすめました。



左：『写真週報』第277号、昭和18年6月23日発行

右：『写真週報』第188号、昭和16年10月1日発行



八木荘村銃後奉公会の記念写真 **〔川口保子さん提供〕**

銃後奉公隊は出征者・戦没者の手伝いをおこなう団体。写真は農作業に出たときのものと思われますが、手伝いに出た人々に青年男性はおらず、高齢者と女性ばかりでした。

食糧増産隊の活動を描いた高瀬昇一郎さんの絵

昭和19年4月に食糧増産隊に入隊して、2年間に
籍された高瀬さん。その作業や宿舎のようすを絵と
文章に描いて説明しておられます。

これによりますと、入隊してから陸軍饗庭野演習場で訓練を受けたあと、彦根市（金亀会館・彦根高商弓道場）、大津市（真野浜・三井寺）、湖南市（下田養蚕場）、近江八幡市（岡山小学校・安土小学校）を宿舎としながら、河川の堤防復旧工事、内湖の干拓工事、農作業の手伝いに従事されていたことがわかります。

食糧増産隊は拠点を定めず、人手が足りないために工事や作業が進まない場所へ遊撃隊のように移動しながら、それぞれ作業に従事していたようです。

[illegible]

近江神宮参道 江若鉄道



小松登の全農協会の号令がかかること(また始まる)なんの苦痛もなく体罰が、何も悪いことしていないのに、この難局は耐えられない。そればかりでなく(それが困難とすうもの)で無抵抗で何年かして上と官には一切逆うこうはできない。15歳の左も右も頼らないで(寧ろ)は早く戦争が終わってしまいたいと願っていた。今の小松性達(のイジメもよく似て)は何い何い、屈臣氏(のイジメ)が偉く戦争はスレサレと、更に上にある。今の凶悪の中にも大に人権(をイジメ)が守られている。おとめがわいて

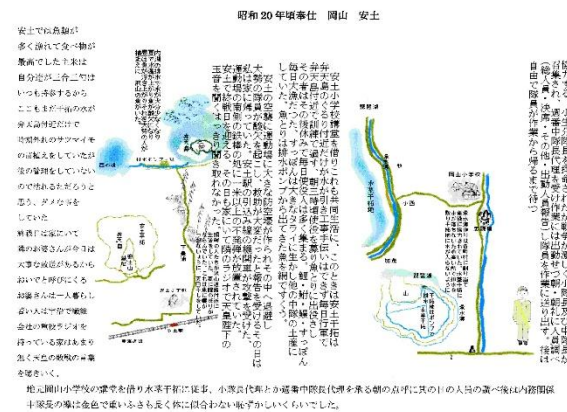
戦時中の訓練

最近には金魚会館に人所した
そこで松原平拓の作業ですが
まだ排水がきておらず
作業はできず、あらこちらに
訓練・行軍とかでした。
今は建物がつまみならず
西の先建物の下に女学校があり
この付近にて重宝山山脈が
つくられたと聞く

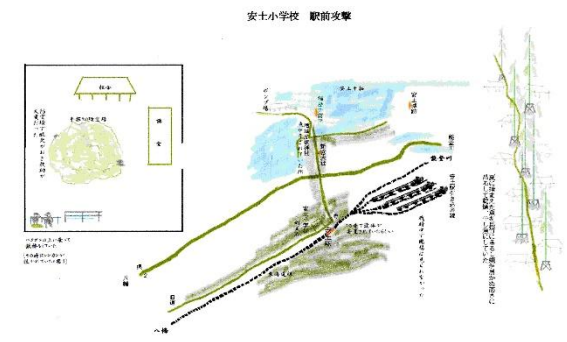


一九四四年までは産業振興専門学校を前身として新制旭川大学が
誕生、昭和十九年からは、富山県立富山高等商業学校（富山大学）として
可成り盛況を博し、また、（学生は）富山大学に在籍して（勤労奉仕に）
従事し、松浦君も受けていた（毎日新聞）富山高等商業学校（富山大学）
館あたりへド口で胸から首まで浸かり、助け合いながら暮らしたものである。

昭和19年～20年彦根高等商学校



昭和 20 年頃奉仕 岡山 安土



安上の東海道徳の引き込みあたりを爆弾投下されていた。死人も何人かが寺に安置されているとの話であったが近寄ることはできなかった。そのじぶんは掌櫃が初めて国民に言われた通りにしていれば何もいわれなかった。なにも判らず仕舞いでハイハイハイでした。小学校の運動場の鉄棒の下に不慮墓が置いてあったその上で鉄棒をしていた。(一は強ぐらい)

安土小学校 駅前攻撃



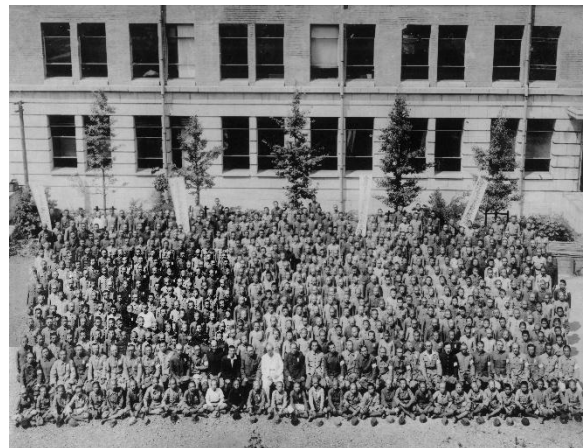
昭和十九年～二十年頃奉仕作業 真野浜 下田



昭和十九年頃 鹿追いの鐘叩き 真野浜



左：「農事講習所第 中隊隊員名簿」（昭和 20 年）
右：「食糧増産隊滋賀大隊隊員名簿」（昭和 19 年）



バナー：食糧増産隊記念写真

昭和 18 年か 19 年、滋賀県庁にて

〔高瀬昇一郎さん・青木安司さん提供写真を合成〕

【体験談：食糧増産隊に参加して】 青木 安司さん
青木安司さんは国民学校高等科を卒業した昭和 18 年、すぐに食糧増産隊に入隊し、3 年間勤められました。入隊のきっかけは役場の方の推薦でした。

高等科卒業しましてすぐに、この少年の兵隊、食糧増産隊のほうへ。その当時、国家総動員法というのがありましてね、学生なんかもみな動員されました。ところが農家の長男だけは動員されないということになった。で、今度は農家の長男だけを、この食糧増産隊、農兵隊に召集しようということになりました。とにかく家にいるということが肩身の狭い雰囲気になってまして、私は行くて言うたんです。

滋賀県大隊という食糧増産隊が編成されて、まず基礎訓練を受けるのに饗庭野へ。兵舎があったんですけども、兵隊さんが出征されて空いてるんです。そこへ私らが入って訓練をね、3 カ月ぐらいいいかなあ。とにかく、軍隊式の訓練ですね。主として開墾を教わりましたね、鋤でする開墾。

で、「君たちは、銃は持てないけれども、銃の代わりに鋤を持って食糧増産に励むんや」と。そんなんで、各地の小学校の講堂なんか泊まって、開墾をしまして、サツマイモなんかをつくりましたね。そしてから、農業用水路の改修なんかね、野洲川から葉山のほうへ取り入れる水路の整備。

私ら第一中隊いいましたけど、第四中隊まで滋賀県にあったんですね。第一中隊は栗太郡、それから

大津と滋賀郡の3郡で編成されてましたね。だいたい各中隊の編成されてる範囲内で動くんですが、琵琶湖干拓で能登川へ行ったっていうのは、その範囲外れてますけどね、そういうこともありました。

(昭和) 19年に、第2期生が入ってきたんです。で、第1期生の中から、分隊長という名前で私らが残りまして、ほかは帰りましたけどね。で、私は3年行きました。給料はもらった覚えはないなあ。奉仕でしたなあ。

もう終戦…、敗戦の色が濃くなってから、比叡山のなかの安楽律院というお寺へ第一中隊が行きましたなあ。今度は竹やりで軍事教練が主でした。「君らは、銃の代わりに鉾を持って一生懸命やってるけれど、敵が上陸してきたら、一人で戦車一台を爆破するんや」と、いわゆる特攻訓練ですな。爆弾を抱えて戦車の下へ飛び込む、その訓練をやりました。

終戦は「何や、負けらしいよ」というようなことで、帰ったと思いますけど、終戦後もまたなんや行ったなあ、何してたんやろ、なんや残務整理みたいなことでしたやろな。

第3章 戦争末期の八日市分廠



飛行場の拡大・分廠の疎開

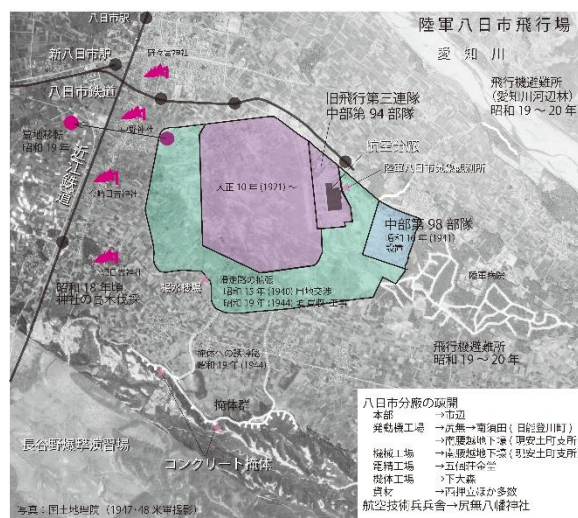
アジア・太平洋戦争の形勢が悪化しはじめると、飛行兵と整備兵を大量養成することが緊急課題となり、八日市飛行場ではここを本拠としてきた飛行第三戦隊が樺太へ移駐し、かわって飛行士と整備士の教育部隊が入りました。前線で消耗した飛行士を養成・補充する必要から、八日市飛行場には大量の新兵が送り込まれるようになりました。

飛行場の周辺には、訓練の支障となる民家や飛行場西方の神社の立木の除去が命じられ、住民は苦し

い生活の中でそれに応じます。昭和16年頃から部隊の増加と飛行機の大形化にともなって飛行場を拡大することになり、19年頃には高圧的な買収を実行して倍近い面積に広がりました。

日本本土への空襲が避けられなくなると、八日市分廠の機能も周辺へ疎開をはじめます。本部は市辺の阿賀神社(船岡山南麓)と近くの隔離病棟へ移ったほか、一部は西老蘇の民家の養蚕室へも移設したようです。発動機工場はまず尻無へ、次に旧能登川町の南須田の工場、続いて旧安土町の竜石山の地下壕(現近江八幡市安土町支所)へ移りました。電精工場が五個荘金堂の関西青年道場へ、組立工場(整備工場?)は下大森へ移り、資材は西押立の神社のほか、旧蒲生町鈴の地下壕などさまざまな場所へ分散保管しました。

分廠が移転した場所はいずれも民間あるいは個人の施設です。本土決戦にそなえて、空襲を避け、軍事機能を存続させることが優先されました。



八日市飛行場の拡大・分廠の疎開地図

国土地理院写真(米軍1947・48撮影)に加筆

【体験談：飛行場の拡張】 Tさん・Fさん・Tさん

昭和9年に兵役につきましたが、父から聞いた話では、15年ごろから飛行練習が激しくなったようです。飛行機が飛び立つコースにあたっていたわが家は、はじめは「屋根に赤いランプをつけよ」との命令でランプをつけていましたが、それでも邪魔になるということで、憲兵命令で16年に立ち退き移転しました。

【表門前の奥村屋のTさん】

飛行場近くの今崎・今堀の神社の森が、飛行機の離着陸の邪魔になるということで、それぞれ100本ずつくらい伐採することになりました。自分が愛知川の業者を連れてきて伐採作業に従事しました。大量の杉を馬車で運んで木材にしようとしたのですが、材質に問題があって使用できませんでした。こんなわけで、今崎・今堀の神社の杉はみな戦後に植林したものです。【軍用機製造の下請け工場のFさん】

飛行機が大型化し滑走路が狭くなってきたので、(昭和)19年から飛行場の拡張を行いました。玉緒村の柴原南・芝原の田んぼが大半です。私は買収交渉にかかわっていませんが、ある意味有無を言わさない買収で、文句を言うものは「国に協力しないのか!」と怒鳴られてしまう状態だったと思います。ずいぶん恨まれたと思います。人は集まらなかったし、道具はツルハシや鍬でしたから、工事は遅れました。

飛行場は倍くらいに広がりましたが、大型の飛行機はすぐに高度が上がらないので、周辺の高木が邪魔になりました。私の着任の前年(昭和16年)には野々宮神社の杉を伐採してもらったので、私が中野村に「東の椋木」の伐採の申し入れをした時には、野々宮神社でも切ってもらったと説明して了解してもらうことができました。

【第94部隊の主計将校だったTさん】

*** 飛行場の拡大は、実際には昭和16年に開始。南辺の蛇砂川を付け替えて拡張する計画でしたが、揚水機場の移転には地元の反対があり、食糧増産の時世から軍側もこれを押し切ることはできませんでした。このため、揚水機場を避けて拡張した飛行場の南縁(蛇砂川)は、蛇行することになりました。**



登記済証書

【体験談：分廠の疎開】

谷 はつ子さん ほか

分廠にいたときにはキ102というB29の襲撃機を整備していましたが、そのあとドイツのユングマンからライセンス製造していた飛行機が来ました。これは翼をはずして胴体を愛知川町の醤油屋の倉庫へ納めました。(昭和)20年6月ごろです。これを整備するのに愛知川へかよいましたが、最後は自動車で行って、その帰りは飛行機の操縦席にのって牛に引っ張らせて飛行場へもどってきました。

*** ユングマンの飛行機：二人乗りの複葉練習機**

【分廠に勤めていたNさん】

分廠は19年ごろから分散疎開するようになりました。われわれが働いていた発動機工場は、まず飛行場に隣接した玉緒村尻無へ引っ越しました。毎日、分廠から整列して通うんです。しかし、ボイラーは運び出せなかったで、いちいち分廠に戻りました。次に接收した能登川町須田の工場へ移りましたが、ここにはボイラーがありました。さらに戦局が厳しくなると、安土町の腰越の穴に移りました。穴掘りには朝鮮半島の人々が従事していました。入口は一つで、中は縦横にトンネルが掘ってありました。トンネルでは水滴が落ちるので発動機にシートをかけて帰りましたが、翌朝には赤さびが浮いてました。

【分廠に勤めていたKさんとSさん】

昭和19年になって、分廠の工場や施設があちらこちらに分散するようになりました。分廠本部は、分廠長とともに市辺の隔離病院跡に移転しました。昭和19年末か20年の初め、分廠の工員さん10名ほどが南方の野戦航空廠に派遣されましたが、かわいそうに、船はイロイロ島付近で沈められたということです。【分廠に勤めていた谷はつ子さん】

昭和20年になると、分廠の施設が各地に分散・疎開することになりました。電精工場は、五個荘町金堂の青年道場へ移転して、高度計や時計を修理したり、発動機の点火栓の整備をしてました。工員の15人くらいは織山頂上の観音正寺で寝泊まりして、毎朝山を下って工場に通ってましたな。

分廠本部は市辺へ、資材係は西押立の神社に移りました。そこには飛行機のガソリンや各種油類、落下傘などが集積されてました。下大森・芝原付近に飛行機の組み立て工場。布引山麓に作られた掩体壕

は、飛行機を解体したり組み立てたりするためでした。

【分廠に勤務していたHさん】

【体験談：飛行場の最後（その1）】

寺井 善七さん ほか

終戦により、兵はみないなくなった。98部隊では隊長以下、現役将校 10 名で終戦処理にあたりました。将校でも幹部候補生から任官した予備将校はすぐに帰郷し、処理に残ったのは士官学校などを卒業した職業軍人です。

【第 98 部隊の将校だったKさん】

（昭和 20 年）8 月 20 日ごろ、分散駐屯先からもとの部隊に戻れと命令がありました。復員の話が出たのは 9 月 2 日です。それまでは完全武装です。中隊の機密書類は全部焼却しました。衛庭で復員式をしたあと解散しましたが、「若年者・独身者・近隣者は武器引き渡しの事務のため残留してくれ」と話があり、終戦の日に兵長へ昇任していた私は残ることになりました。

管理要員は 3、4 班に分かれ、1 班は下士官 1 名、下士官勤務者 2 名、上等兵 15 名ほどの約 20 名でした。私は、ほうぼうへ分散保管していた被服類を回収してまわりましたが、農家の倉庫に置きざりになったのもあったと思います。兵器・銃・被服などが格納庫に積まれ、飛行機 40～50 機が外に並んでました。これらの監視のために、管理班が交代で歩哨に立ちました。

米軍が来たのは 10 月はじめ。正式調印がすむまで武装して階級章もつけていました。双方対峙するかたちで監視を続けました。任務を終えて帰郷したのは 11 月中旬で、3 か月分の報酬 600 円をもらいました。

【第 98 部隊の下士官だった寺井善七さん】

進駐軍に引き渡す 10 月末まで、臨時憲兵として警備に残りました。進駐軍が入ってしばらくは米兵といっしょに番をし、焼きいもを食べたりしました。特に親しくしたわけではないですが、米兵は愉快的な兵隊たちでした。

【分廠の整備兵だったYさん】

10 月末くらいに米兵の上官が来て場内を見てまわりまして、私たちもついて歩きました。こうして警備の仕事が終わり、みんなとは遅れて復員しました。兵舎の縁の下には持ち帰れなかった軍服や毛布

がたくさん押し込んであって、分け合って持って帰りました。モノ不足の時代でしたから、帰ってから食糧と交換するのに大助かりでした。

【第 98 部隊の整備兵だったHさん】

【体験談：飛行場の最後（その2）】 Nさん ほか

分廠長は「アメリカに引き渡すぐらいなら飛行機部品を持ち帰れ」と言っていたそうです。八日市の自転車組合は、飛行機の予備のタイヤを払い下げてもらって、リヤカーのタイヤになったと聞いてます。御園若松に墜落して放置された飛行機は、ガソリンタンクに巻いたゴムを取り外すのに打ち壊されました。このゴムは草履に再生されたそうです。飛行場を開墾していた時には、コンクリート誘導路に並べた飛行機が燃やされているのを見えています。

【分廠に勤めていたNさん】

戦後、あちこちにおいていた飛行機は、あつというまにいろいろな部品が盗まれました。民間では使えそうにない計器をはじめ、どうやって取り外したものの、タイヤまで盗まれていることもありました。

【分廠にいたDさん】

八日市へやってきたアメリカの進駐軍十数名は、偕行社で寝泊まりしていました。住友から飛行機の解体にやってきて、近所の人を使って作業を進めていました。責任者の方は「うを民」に下宿してます。家ではジュラルミンの翼を 2、3 枚もらって、家のひさしに使っていたことがありました。

【飛行場表門前の「うを民」のOさん】

昭和 21 年 2 月に町役場から飛行場跡の財産監守に来てくれないかと誘われて、大蔵省の出先機関に 1 年ほど勤めました。旧戦闘指揮所で寝泊まりし、2 交代でパトロールしました。たしか住友金属の人やったと思いますが、飛行機の残骸の払い下げを受けて、ジュラルミンやゴムを集めてました。戦後、ジュラルミン製の自転車や鍋が出回りましたが、こういう形で使われたんやと思います。

農地開発営団のあっせんで飛行場跡に入植した人が 30～40 世帯、兵舎を区切って暮らしていました。飛行場の無線等は小浜漁業組合が持ち帰っています。98 部隊の兵舎では明治製菓が一時操業していて、そのあと玉園中学校が購入しました。94 部隊の建物で

はパルプ工場が操業していたと思います。

大蔵省の事務所があった憲兵隊の建物は、そのあと愛知川土地改良区が使用するようになりました。

【Uさん】



パナー：終戦後八日市飛行場で焼却される飛行機【個人提供】

第4章 戦後の飛行場



飛行場の開拓

敗戦のあと、軍隊は解消され、陸軍省は第一復員省となって復員事務を管轄しました。陸軍の財産であった八日市飛行場は大蔵省に移管されました。飛行機の残骸や部品、分廠の機械類などは民間に払い下げられ、業者がジュラルミンやゴムを回収していたそうです。なかには所属した軍人が復員とともに持ち帰ったり、周辺の人々が持ち去ることも頻発しました。敗戦で社会秩序が崩れてしまったことに加えて、戦中から深刻な物不足が続いていたので、どんなものであれ生活に役立ったのです。

やがて、兵舎も民間に貸し出され、パルプ工場や製菓工場が操業した時期もありました。第98部隊の兵舎の一部は、新設の玉園中学校の校舎にも使われました。

大蔵省が管理した広大な飛行場用地は、さらに農

林省へ移管され、食糧増産のために開拓されることになりました。土地は復員者と周囲の町村民に割り当てられ、入植者はしばらくのあいだ兵舎で共同生活をしていたといひます。

もともと農地に適さず、そのために松林や荒地であったところへ飛行場を建設した場所でした。愛知川の氾濫原であるため、地中には大小の石が詰まっていたため、開拓にはたいへんな苦労があったといひます。

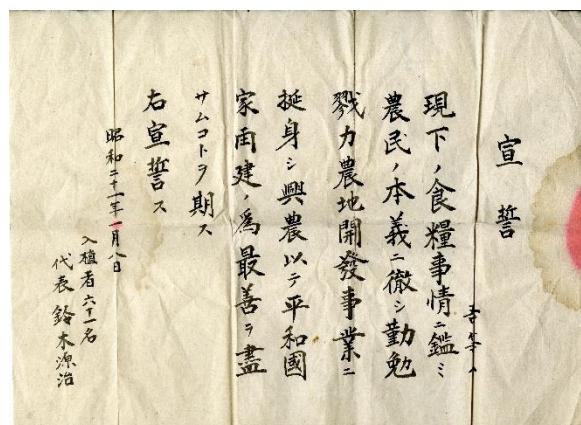
【体験談：第一次入植者 鈴木源治さん】

（御子息のお話）

鈴木源治さんは元飛行部隊の大隊長で、八日市飛行場にも籍を置いていたことがありました。戦後は第一次開拓団に加わって沖の原開拓農業協同組合の組合長をつとめ、旧飛行場の開墾に尽力されました。

父は陸軍飛行隊の大尉で、埼玉県熊谷飛行場のあと、八日市飛行場（飛行第三連隊）にいた。終戦の知らせを聞き、自害しようかと思ったそうだが、場長に見つかって止められ、果たさなかった。戦犯容疑の名簿にも載せられたが、場長が手を尽くして解消してくれたそうです。場長の説得で、先に亡くなった部下のためにも家族のもとへ帰り、生き続けることになった。

戦後は、進駐軍が八日市飛行場内の飛行機を焼却しているところを実際に見て、飛行場跡は空地で放置するよりも、開拓して食糧の増産に努めたいと考えて、県に掛け合ったそうである。県より入植が認められ、正式な入植者の第一弾の代表を務めた。その時の誓約書は今も大切に保管している。



「宣誓」

【個人所蔵】



「拓魂」碑 東近江市沖野町会館前

〔当館撮影〕

【体験談：八日市飛行場の開墾】 小森 章次さん
八日市分館におられた小森章次さんは、海軍から復員して地元御園村役場に就職され、農地改革と旧飛行場の開墾の事務に従事されました。飛行場跡地は陸軍省から大蔵省、さらに農林省に所管が替り、引揚者・復員者・失業者と周辺町村の自作農の増反者に売り払われました。以下は小森さんの手記からの抜き書きです。（一部改変）

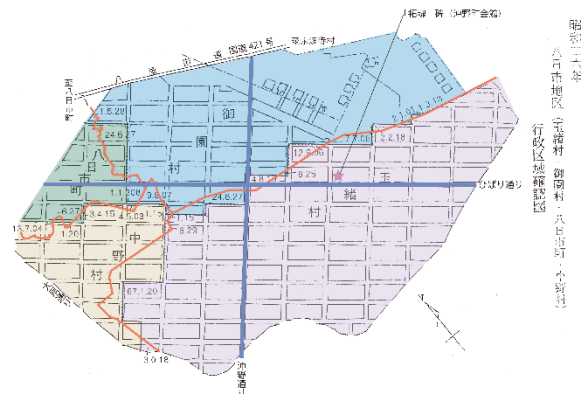
この飛行場は大正時代に御園村・八日市町・玉緒村・中野村の領域から成り立っていて、開墾地とするにあたっては、官有地が民有地になるため地番設定も必要で、飛行場ができる前の姿に戻し町村境界を復元する必要がある、また字界を直線にする必要もあって、旧町村界を基準にして、従前の面積とあまり差異が無いように町村界を決めた。〔中略〕事前に区画は2町歩(東西100間、南北60間)として、これを区切る東西線は5m、南北線は4m、東西幹線道路(ひばり通り)は12mの幅員道路を設け、その方向は国道421号に平行させる考え方もあったが、それでは町村間の増減調整が難しくなるので、太郎坊宮に向かって直線の道路計画が最適との結論で現在のような区画になった経緯があります。

開墾については、沖の原開拓農業協同組合の組合長鈴木源治氏(元第94部隊、戦闘指揮所の大隊長大尉)の許ですめられ、私と鈴木様と再三県庁へ足を運びました。

戦後の海外引揚者の入植者は開墾計画の中央部に、地元周辺4町村の増反者は各々昔の町村域の外縁部に売り渡されたが、この八日市飛行場は河川敷が変化した跡地で石礫が多く、掘り返せば今にも魚が住んでいるような礫層で、地盤が固く雨水が地下浸透

するので飛行場としては日本一であったが、開墾には全く不向きで、耕地にするには大変至難な土地であり、重機も無く、耕作表土も無いなかを、一つひとつ石を掘り出して計画道路に積み上げて、わずかな土で表土を作り農地とされた。その努力と苦労は筆舌に尽くしがたい作業であったと思います。〔中略〕

昭和47年頃に田中角栄総理大臣が日本列島改造論を叫ばれたと同時に、急激に農地も宅地化され、開拓地の姿も変貌して住宅が建ち、今では開拓地は探さなければ見つからない状況にまで都市化した。開拓地の計画道路には、開墾で出てきた石が堤防のように積み上げられて道路の用をなさなかったが、建設業界が活発に動き出すとまたたく間にコンクリートのグリ石にするのに持ち去られた。開拓者にとっても無償で道路がよみがえり、一挙両得の現象が生じた。



昭和26年 八日市地区(玉緒村・御園村・八日市町・中野村)
行政区域確認図



パナー：左上 旧御園村役場建物(東近江市御園町所在)
右下 旧愛知郡役所建物(愛知郡愛荘町愛知川所在)
写真の背景は開拓中の旧陸軍八日市飛行場



心象沖野開拓図へようこそ

私達の住んでいるこのあたりは、明治・大正の初めまでは沖野が原とも呼ばれて松の林や草地でした。樹木は燃料に、草は家畜の飼料や田畑の肥料に重要で、周辺の村々の重要な草刈り場になっていました。

大正の初め（大正3年）に荻田常三郎という方が、飛行機が出来てまだ10年くらいのときに初飛行を沖野が原でされました。いま八日市南高校があるあたりです。その後民間飛行場の開設から陸軍飛行場の誘致・建設となり、大正11年に陸軍航空第三大隊が来ました。その後拡張されて現在の国道421号線から蛇砂川まで・聖徳中学校から玉園中学校までの広大な陸軍飛行場でした。

昭和20年に太平洋戦争が終わり、国は食糧増産のため飛行場を開拓地として解放し入植者を募集しました。現在の沖野1丁目から5丁目がその開拓地です。この絵図は、沖野が出来始めた昭和20年から35年頃を「心象図法」で描いたものです。

入植された方々に、当時の体験や出来事・思い出を「五感体験アンケート」で出して頂き、体験項目についてより詳しく尋ねるような「聞き取り調査」をしました。そして「聞き取り調査集」を作成し、その中から41項目を選んで絵にしました。

この絵図は、時代を左上から左下（昭和20年から昭和35年）、季節を右上から左下へ冬・春・夏・秋と描いています。上は、鈴鹿山脈と愛知川です。下の川は、蛇砂川です。

この絵図1枚で開拓を進めて田畑を造っていった様子と、四季折々の作物・風景などを描いているので楽しんでください。

東近江市南部地区まちづくり協議会

第22回企画展示「戦時下の村と陸軍飛行場」(会期:平成31年1月9日～令和元年6月2日) 展示資料一覧				
プロローグ				
No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	糸繰り機	1		個人提供
第1章 大阪陸軍航空廠八日市分廠				
2	賞状 永年勤続賞	1	昭和16年12月20日付け	個人提供
3	八日市分廠工員募集	1	「陸軍航空廠技術員(軍属)大募集」	朽木郷土資料館提供
4	工員細部心得	1		野村和男さん提供
5	機関砲附属品	一式		北村正太郎さん提供
第2章 増産と供出に追われた村				
6	田植え縄	1		個人提供
7	苗かご	1		個人提供
8	ざる	1		個人提供
9	もみ探し	1		個人提供
10	ほうき	1		個人提供
11	ちり取り	1		個人提供
12	国民精神総動員家庭実践心得	1	雑誌『家の光』附録	高橋 正さん提供
13	会誌『ほまれの家』第15号	1	恩賜財団軍事援護会発行	高橋 正さん提供
14	チラシ	1	やまと化成肥料三號	高橋 正さん提供
15	チラシ	1	大日本化成八号肥料	高橋 正さん提供
16	もっこ	1		個人提供
17	木銃	1		個人提供
18	石碑拓本	1	「殉職農士顕彰之碑」	個人所蔵
19	『写真週報』第277号	1	昭和18年6月23日発行	個人提供
20	『写真週報』第188号	1	昭和16年10月1日発行	個人提供
21	「食糧増産隊滋賀大隊隊員名簿」	1	昭和19年	青木安司さん提供
22	「農事講習所第 中隊隊員名簿」	1	昭和20年	青木安司さん提供
第3章 戦争末期の八日市分廠				
23	登記済証書	1		苗村増和さん提供
第4章 戦後の飛行場				
24	八日市飛行場で使われていた品々	一式		個人提供
25	心象沖野開拓絵図	1		南部地区まちづくり協議会所蔵

※令和7年7月編集